

学びの継続性を意識した小学校・中学校における保健教育に関する研究：
学習内容の印象に関する実態調査を手がかりとして

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2020-03-10 キーワード (Ja): 小中接続, 印象度 キーワード (En): 作成者: 深澤, 多恵, 鎌塚, 優子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027130

学びの継続性を意識した小学校・中学校における保健教育に関する研究 —学習内容の印象に関する実態調査を手がかりとして—

深澤多恵

(静岡大学教育学部附属静岡中学校)

鎌塚優子

(静岡大学教育学部)

A Study on Health Education at Elementary and Junior High School with a Concept of Learning Sustainability

— Based on a field survey regarding impression on learning content —

Fukazawa Tae, Kamazuka Yuko

要旨

本研究は、小学生・中学生への、保健授業に着目し、どのような内容が印象に残るかの実態を明らかにすることにより、保健授業の指導方法について検討するとともに、小学校での学びの継続と中学校でのさらなる発展のための手立てを考えること、さらにこれをベースにしながら地域の養護教諭へ保健授業の認識を高めていくことを目的とする。

中学生への実態調査により、保健の授業内容をより印象に残るようにするために、発達段階をふまえながら自己との関連を深める授業内容や、小中の接続を考慮しながら心身の変化を感じられる内容にしていくことが大切であることが明らかとなった。

研究協議会での検討により、【生活とのつながり】【興味・実感、追求】【授業づくりと活動形態の工夫】【定着度の確認】【専門性を高める】のカテゴリーが抽出された。これらの内容を有効に活用していくこと、自分の学校の健康課題を把握し、課題をふまえた上で、日常生活と関連させて具体例を提示したり自分の生活を振りかえったり、生活とのつながりを持たせて自分事としてとらえさせたりすることが大切であることが示唆された。

小学校・中学校にとってより子どものニーズや実態に合った保健教育を進める上での有効な手立てを把握することができた。

キーワード：小中接続 印象度

I. はじめに

現代社会における健康上の問題は、様々なものがある。生活習慣の乱れの問題、喫煙・飲酒・薬物乱用の問題、性に関する問題、いじめ・不登校の問題、勉強や人間関係による悩み等、心身の健康をめぐる問題は多様化している。これらの問題は、近年急速に発展した情報化により複雑に絡み合い、これまで以上に解決が難しくなっている。そのため、子どもたちが「自らの心身の健康は自ら守る」という意識を身につける必要がある。他者と健康について語り合ったり、協働して健康に関する取り組みを行ったりすることで、健康への意識を高めることができると期待できるため、より一層の保健教育の充実が求められている。

しかし、校種の違いや地域により、保健課題が大きく異なり、求められる保健教育は異なっている。地域によっては、様々な経済的や生活上の事情により子どもたちを苦しめている現状もある。十分な教育を受けられず正しい知識を学ぶ機会が失われていたり、保護者の養育能力の欠如から基本的な生活習慣が身についていかなかったり、若年の妊娠・出産という課題を抱えていたりすることもある。また、マズローの欲求5段階説にもあるように、自分の欲求の段階によても保健教育の必要性は異なる。さらには、教育者と児童生徒・保護者との価値観の相違から保健課題のとらえ方

も異なり、それに伴いニーズも変化していく。

保健教育は、その後の人生のみならず次世代にも大きな影響を及ぼすこともある。十分な支援を得られていない子どもたちにとっては、義務教育である中学校の保健教育が最後の砦ともいえる。しかし、このような実態にもかかわらず、ニーズに応じた保健教育が実施されているとは言い難い現状がある。だからこそ、健康課題の把握とともにニーズに応じた保健教育の実践が必要となる。

そこで、本研究では、小学生・中学生において、保健授業の内容に着目して、保健授業の内容についてどのようなものが印象に残るかの実態を明らかにし、保健授業の指導方法について検討するとともに、小学校での学びの継続と中学校でのさらなる発展のための手立てを考えること、さらにこれをベースにしながら地域の養護教諭へ保健授業の認識を高めていくことを目的とする。

II. 研究の背景

1. 本校生徒の実態

本校の保健室に来室する生徒の多くは、客観的にみても健全な生活習慣とは言えない生活をしている。睡眠時間が少なく「ねむい」「だるい」「イライラする」と訴えソファーに寝転がる生徒、「頭が痛い」と

身体症状として現れているにもかかわらず、夜 12 時過ぎに寝ても「これが普通だよ」「塾があるからしょうがない」「みんなそうだから」と言って、睡眠時間が少なく、健康課題としてとらえていない生徒が多く見られる。

保健室に来室しない生徒も、常に多忙な生活を送っている。保護者からの期待も強い様子が垣間見られたり、習い事や生徒会活動も積極的に取り組んでいたりする様子がみられる。2018 年に本校で実施したライフスタイルアンケートの結果によると、全校で約 9 割もの生徒が学習塾へ通っており、全国平均の 2 倍近くにも及び、睡眠時間は全国平均と比べて約 30 分短く、睡眠時間の短縮による生活習慣の乱れとメンタルヘルスに関する自覚症状等、心と体の両面からの課題が認められる生徒もいる。また、友達とのコミュニケーション不足による思いの食い違いからくるトラブルのある生徒、人間関係が希薄な生徒、規範意識が低い生徒、清掃を丁寧にやっていない生徒など多岐にわたっている。

これらの子どもたちの健康状態や行動は、これまでの生活や取り組みと密接な関係がある。しかし、小学校と中学校の教職員の子どもの情報共有について、健康上や生徒指導上配慮の必要な児童に関しては簡単な申し送りがあるが、出身小学校が多岐にわたり、多忙な時期とも重なるため、十分な情報共有は難しい。そのため、中学校の教職員は子どもたちの現在の様子からしか、その健康状態をみるとことができない現状がある。もし、子どもたちのこれまでの生活や取り組みを把握することができれば、教職員は子どもたちの健康・安全に対する意識をさらに高め、学校生活の基盤をより安定したものにすることが可能である。そのためにも、小中の接続を意識し、情報共有やエビデンスに基づいた保健教育を充実させることが重要である。

2. めざすべき保健教育の分析

保健教育について、文部科学省（2019）では、心身ともに健康な国民の育成を期するために極めて重要であり、小学校における保健教育がその基礎を築き、さらに中学校及び高等学校での保健教育を通じて積み重ねていくことが必要であると述べている。

特に小学校教育においては、低学年からの生活習慣の乱れがみられること、就学前教育あるいは義務教育としての中学校教育との円滑な接続を図る必要があること等から、各学年の発達段階の特徴を考慮して、身近な生活における自己の健康課題に気づき、その課題解決に向けて自ら取り組み、健康な家庭や学校づくりに貢献するための資質・能力の基礎を育成することが大切であるとしている。また、この資質能力を体系的なものにするために、身近な生活における健康・安全に関する基礎的な内容について「より実践的に理解する」ことが重要であるとしている。

一方、中学校教育については、日本学校保健会（2013）では、中学生期は発達の段階からみても、思春期として心身が劇的に変化する時期であり、これらの変化に適切に対応できるようにするための教育が必要となると指摘している。また、義務教育の最終段階としてすべての国民が身に付けておくべき健康リテラシーの基盤を形成すること、さらには、小学校と高等学校の保健学習を見据えた「より科学的」な保健認識

を形成すること等の重要な意義を持つこと、高等学校においては「より総合的に」理解することを各発達段階における特徴としている。各発達段階を意識しながら系統性を持たせるためには、「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指すことが求められている。文部科学省（2017a）において、「カリキュラム・マネジメント」の実現及び「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進する観点から、発達の段階のまとめを踏まえて、小学校段階との接続と高等学校への見通しを重視し、系統性を踏まえた指導内容の見直しを図ることとしている。このように文部科学省等では小中高での学びの系統性を重視しているにもかかわらず、具体的に系統化して実践している文献は、体育分野では見られるものの、保健分野においてはあまり見られない現状がある。

さらに、保健教育で子どもたちは何が身についたのか評価が十分に行われていない現状があり、小中の評価の共有はいっそう難しい状況である。また、学びの定着を確認しないことの弊害についての研究も十分とは言えない。そのため、学びの定着を確認し、もう一度中学 1 年生の段階で学びを再確認し内容を深めることのできるように考慮する必要がある。

保健授業の内容については、これまでに山崎ら（2018）が大学生を対象に行った調査では、印象に残る授業内容として、小学校では体の変化や食事・運動・休養・睡眠について、中学校では心身の機能の発達と喫煙・飲酒・薬物乱用についての授業内容が印象に残ることを明らかにしている。また、指導としては小学校では基本的な日常生活と授業内容との関連を図ること、中学校では自身の心身の変化をとらえそれと関連付けた授業内容を考える必要があると述べている。さらに、指導者は、教科間の連係や外部講師の活用と繰り返しの指導、活動形態の工夫によって学習者の授業内容に対する印象や理解が深まるとしているものの、これは現役大学生が小学校・中学校等過去の授業内容を振り返った調査によるものであり、現在の児童生徒の実態に即しているかは不明である。

III. 研究方法

本研究では、目的に迫るため、2 つの方法を用いた。
①生徒の保健の授業の印象に関する実態調査（以下、方法 1）②実態調査を基に保健教育に関わる養護教諭、教諭及び養護教諭養成大学の学生の議論（以下、方法 2）を分析した。

1 方法 1

1) 対象及び研究方法

この調査は、中学 1 年生が小学生時に学んだ保健の授業に関する知識理解や関心について調査し、実態を把握するために実施した。

（1）調査日

令和元年 7 月 2 日（火）から 3 日（水）にかけて実施

（2）調査対象 1 年生 144 名

回収率 98.6%（男子 79 名 女子 63 名）

（3）調査方法

調査方法は、無記名式自記式質問紙法を用いた。

(4) 調査内容

調査内容は、3つの質問で構成され、質問1については、小学校の時に学習した保健授業の単元を7つに分けたものと身体測定での保健指導という項目別に分け、印象に残っている順番に回答した。質問2については、印象に残っている内容と理由を自由記述で回答を得た。質問3については、現在も役に立っていることや継続していることについて自由記述で回答を得た。

(5) 分析方法

得られた回答はデータ化し、単純集計を行った。項目については、山崎らによる先行研究を参考に、新学習指導要領の枠組みで分析した。

また、質問2の自由回答については、先行研究を参考にしつつ類似する内容を集約しカテゴリーを生成した。生成されたカテゴリーを【】、サブカテゴリーを〔〕で示す。

質問3については、現在も役立っていることや継続していることについて具体的に記述されている箇所を抽出してコード化した。さらに、ツリーマップとして割合別に面積に表して、量的な関係を視覚化したものを、KJ法にてカテゴリー化して分析した。

2) 倫理的配慮

研究対象者へは、授業内に研究の趣旨説明と個人情報保護についての説明を行い、同意を得たものについて回収した。プライバシー・個人情報の保護のために、個人が特定できないように調査票への記入は無記名とした。データの保管については、研究代表者が管理し、第三者には渡さないようにした。

2 方法 2

1) 対象及び方法

(1) 対象：保健教育に関わる養護教諭、教諭及び養護教諭養成大学の学生

(2) 方法：研究協議会での検討

＜研究協議会の流れ＞

- ① 開会
- ② 本校養護教諭から研究協議会についてと今年度の実践発表
- ③ ワークショップ
 - ・実践発表を受けて、グループごと話し合い
 - ・グループごと発表
- ④ ワークショップについて指導・講評、講話
- ⑤ 質疑応答
- ⑥ 閉会

「子どもたちが主体的に心と体の健康を育むための保健教育のあり方について～小中接続に焦点を当てた教材開発が、これから保健教育を変える～」をテーマに、研究協議会を実施した。実態調査の結果を分析した実践発表を受けて、ワークショップにてグループごとに、保健教育における印象度の低い単元について、①なぜ印象に残らないのか②印象に残るためににはどのような手立てがあるか検討した。

2) 分析方法

グループごとに提出された意見をについて類似する内

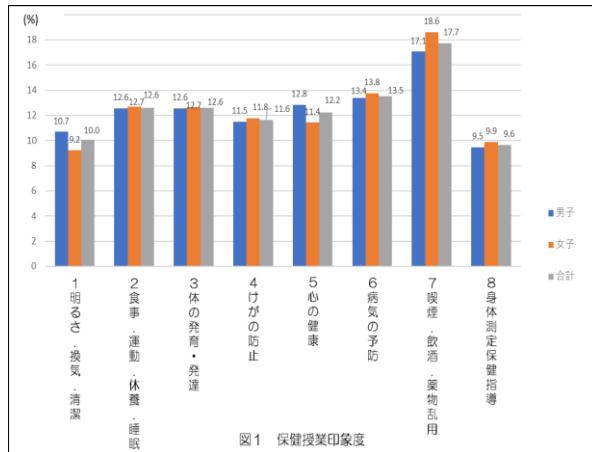
容を集約し、カテゴリー化した。

IV. 結果と考察

1. 方法 1

1) 保健授業に対する印象

小学生時の保健授業の単元・授業内容に対する印象は、図1のとおりである。t検定の結果、男女による有意差は認められなかった。



グラフから、「病気の予防（喫煙・飲酒・薬物乱用）」について印象度が17.7%と一番高く、次いで「病気の予防」13.5%、「健康な生活（食事・運動・休養・睡眠）」12.6%、「体の発育発達」12.6%、「心の健康」12.2%、「けがの防止」11.6%、「健康な生活（明るさ・換気・清潔）」10.0%であった。さらに、身体測定時における保健指導は9.6%で、印象度が一番低かった。

喫煙・飲酒・薬物乱用についての印象が他に比べて高い理由は、薬学講座として毎年必ず実施されていることや教材が多いこと、専門家との連携を行っていることなどから印象が強いと考えられる。その一方で、十分に保健の授業をやらずに薬学講座に頼っている部分も多いのではないかことが危惧される。

他の項目について、「健康な生活（明るさ・換気・清潔）」がやや他の項目に比べて印象が薄いことから、健康と環境について、今後小学校での学びの継続と中学校でのさらなる発展を図りながら印象度が上がるような指導を行うことで、生涯にわたって継続的に実践する力を身につけることができる可能性がある。

一方、身体測定時の保健指導の印象が一番薄いことについては、授業に比べて実施時間が短いことや、身体測定での自分の結果について知ることが主な目的であることから、その前後の保健指導の内容が頭に入ってこないことが考えられる。また、実施については十分に内容を検討する機会がなく、養護教諭の裁量に任されている可能性もあり、保健の授業と関連させるなど工夫を重ね、印象に残るような方法論を検討していく必要性がある。

2) 印象に残る保健授業とその理由（表1）

小学生時における授業内容が印象に残った理由について分析した結果、大学生対象の先行研究と同じように、8のカテゴリーに分類され、多い順に【学習内容

表1 保健授業が印象に残った理由

カテゴリー	サブカテゴリー(新)	サブカテゴリー	代表的なデータ	データ数
自己の心身 【18】	経験との関連性	経験との関連性	・よく小学校の頃によくかぜやケガをしていたので、予防や治し方などをよく聞いた覚えがあったから。 ・その時に、生活サイクルがとても乱れており、ためになると感じたから。	8
	自己の心身ごとの関連性	自己の心身ごとの関連性	・タバコを吸い続けた結果の肺の状態や薬物の無限ループについて自主的に読んでいたページがそこだったから。	1
	自己の発達段階との関連性	自己の発達段階との関連性	・これから自分の身体がどのように変化していくのかな?と興味を持ったから。 ・当時、悩みを抱えそうになっていたがその授業で様々なものが変わったから。	9
自己と周辺環境 【23】	身近な話題	身近な話題	・ニュースにもなっているので印象に残っている。(7) ・父がたばこを吸うので気になったから。(3)	17
	生活とのつながり	生活とのつながり	・食事や睡眠は生活の中で大きいかわるので、知つていて得しました。 ・心が健康でないと、日常生活を普通に連れなったり友達と会話をするのが苦手になってしまふなど自分が気持ちよく生活できなくなると思ったから。	6
学習内容と自己 【60】	授業内容への興味	授業内容への興味	・これから自分の身体がどのように変化していくのかな?と興味を持ったから。 ・飲酒や薬物、たばこなどで、体がどうなるか、知ることが興味深かった。	4
	学習内容の理解	学習内容の理解	・睡眠の時間確保ではなく、睡眠の前や睡眠の仕方を教わった。そんな分かりきっていなかったからだと思う。 ・思春期の体の変化や成長について学べた。また、それについて深く考えることができた。	16
	*授業時の感情	授業内容の印象	・驚き(3)・怖い、恐怖、恐ろしい(7)過激(1)・危機感を感じた(1) ・楽しさ(3)	15
	学びによる新たな気づき	学びによる新たな気づき	・「自分がどうなり立っているのか」「自分」を知ることができたから。 ・からだの健康は知っているけど、心の健康は知らないで、心も病気になるということがとても印象に残った。	8
	*将来への展望	将来に役立つであろう期待	・これから、自分が体験することを事前に知っておくことができた。 ・(薬学講座で)これは、自分の将来にも関わることだからと関心をもった。	9
	*学びの実践	学んだ内容の活用(中)	・保健の授業教わったことを家でも実行しているから。朝、昼、晩なるべく食事をしないと元気になれないなど。早寝早起きをする。	1
	*学びによる決意		・人々薬物は使用しないと思っていたが、授業を聞いて改めて使用しないと思うことができた。 ・たばこを吸うと肺が黒くなってしまう。これを聞いたら絶対に吸わない!と印象に残った。薬物はよくない。	5
	*疑問をいだく		・健康管理ということで運動をするしないでどうなるかなどを考えたから。 ・不安や悩みへの対処理由はわからない。	2
	*視覚的具体物の活用	印象に残る視聴覚機材の提示と活用	・病気の予防です、実験をして本当の怖さを知れたから。一金魚を使った、写真や図で教えてもらった。 ・手についたばい菌を増殖させて見えるようにする。 ・薬をジュークやお茶で飲んでしまった際、胃の中でどのようなことが起こっているのかということを実際に見たから。	9
授業づくり 【40】	*変化画像の活用	印象に残る教材の工夫	・喫煙で色が変わった肺や薬物でボロボロになった歯が印象に残っているから。 ・タバコで肺が黒くなること。写真を見て、やばいなと思ったから。	10
	外部講師の活用	外部講師の活用	・病気の予防で、特別講師が来てくれたから。 ・病気の予防の薬物・タバコをやると肺が黒くなってしまうこととか、お酒を未成年が飲むとどうなるか(覚えてないけど)そういうのを、専門の先生が来てわかりやすく教えてくれたから。 ・保健センターにいる人が学活に来て、病気の予防や、たばこの怖さについて教えてもらったからです。	12
	*実習生の活用		・実習生の授業で何回も勉強して深く考えたから。 ・喫煙の授業は、実際にたばこの代わりにシガレットを使って動作を行いました。これは、実習生の授業で行いました。	3
	授業の方法	授業の方法	カード(?)を渡されて、ラインの返信をするときどうしたらしいかを考え、それが1番印象に残っている。	1
	*実施時間や時期との関連		・ただ一番最近にやったから。 ・一番授業時間が長かった。	5
活動形態 【11】	体験型の学習方法	体験型の学習方法	・救命の講習。AEDの使い方と心臓マッサージの行い方を学んだ。実際にやるから救急の現場がよく想像できた。私自身がとても面白くて楽しい授業だったと感じていたため。	1
	グループワーク	グループワーク	・予防対策などを班で考えたことを一番覚えている。班の代表で発表したのを覚えているから。	1
	*実験		・クラスで行った換気実験。窓を閉めた時、開けた時、どのような変化があったか調べた実験。理由→その後の生活に応用(活用)できたらから。 ・寒天のようなもの(汚れが黄色く浮かび上がる)に手を洗った手、洗ってない手、石けんで洗った手をつけて汚れの大さを比較した。実際に体験したから覚えている。	4
	*男女別		・男子と女子に分かれて違う場所で長くやったから。	1
	*薬学講座		・薬物乱用の授業で、実際に薬学講座をやってもらっていたから。 ・薬学講座をやって専門の先生が話をしてくれたから。	2
	*委員会活動との関連		・少し特別な感じで委員会として進めていたから。委員会で準備・運営をしたから。 ・小学校5年生のときに、喫煙などのことについて、司会進行をした。	2
授業外の時間 との連係【3】	繰り返しの指導	定期的・繰り返しの指導	・先生がいつもしゃべってたから。	3
		時間外の指導	・毎回の身体測定で病気の予防について短くやつてくれて覚えやすかった。	
授業外の活動【1】	テスト	テスト	・テストが難しかったから→覚えた	1
教員の個性 【3】	教員の印象	教員の印象	・先生の体験談をしていて、それが面白かったから。	2
	教員のわかりやすさ	教授の丁寧さ	・男の人と女の人の関係について学んだことが印象に残っている、その時の担当の先生がわかりやすく、うまく記憶に残るよう説明してくれたから。	1

() 内は同じ内容のデータをまとめた数

*は新たなサブカテゴリー

と自己】【授業づくり】【自己と周辺環境】【自己の心身】【活動形態】【授業外の時間との連係】【教員の個性】【授業外の活動】となっていた。さらに、カテゴリーごとにサブカテゴリーを生成したところ、29のサブカテゴリーとなり、そのうち13は先行研究のサブカテゴリーとは異なるものとなった（表1）。先行研究の分析と合わせて考察する。

【学習内容と自己】については、授業により自分自身が行っていた行動の理由が理解できたことによる【学習内容の理解】を得たことが、一番印象に残った理由としてあげられた。先行研究においては、「学習内容の理解」は、小学校においては比較的少なかったものの中学校・高等学校と上がるにつれてこの項目が増えた。理解が実践に繋がっているかは不明であるが、附属校特有の理解力の高さが伺える結果となった。知識の取得だけでなく、深い学びを得て内容の理解に繋げている生徒もいた。次に多かったのが、新たなサブカテゴリー【授業時の感情】であり、先行研究で【学習内容の印象】と類似していたものの、感情的な要因で印象づけている内容が多かったため、新たに項目とした。怖い・驚いた・危機感を感じた・楽しかったなど、授業時に感じた喜怒哀樂が、無意識のうちに記憶として残り授業を印象づけていると考えられる。

次に、新たなカテゴリーである【将来への展望】が多くあった。将来への見通しを持つことや将来に役立つ知識を得たことにより、今の自分の生活だけでなく、将来の自分を想像する機会にもなっていることが、印象に残る要因と考えられた。

次いで、自分がどうなっていくのか初めて知ったというような【学びによる新たな気づき】が多くあった。他にも新たに生成されたサブカテゴリーとして、【学びの実践】、【学びによる決意】、【疑問をいだく】ことにより印象に残ったという意見が抽出された。

【授業づくり】については、【外部講師の活用】が最も多く、専門性の高い外部講師による授業はわかりやすく、保健教育において重要な役割を果たしていた。

次いで、【変化画像の活用】が挙げられた。先行研究においては、【印象に残る教材の工夫】と【印象に残る視聴覚機材の提示と活用】とされていたが、特に体の状態が悪化する様子など、変化に着目して視覚的にとらえることが、印象に残る要因となっていることが明らかとなった。この“変化”は、言葉より視覚的に示す方が児童生徒の理解につながりやすかったり、恐怖や危険性が伝わりやすかったりすることが考えられる。また、実演などを通じて普段目では見ることができないものを視覚的に見せるなど【視覚的具体物の活用】も上位に印象に残る結果となった。【実施時間や時期との関連】も新たに生成され、一番後の授業だったことにより印象に残っているという意見もあった。さらに、先行研究にはなかったもので新たに【実習生】が実施したため印象に残っているという附属校特有の意見もあった。

【自己と周辺環境】については、ニュースや家族などの【身近な話題】が興味を引きやすいこと、【生活とのつながり】は、日常生活をよりよくし、自分にとってメリットのあるものが印象深いと考えられる。

自己と関わりのあるカテゴリーについて印象に残っていることが多いため、小学校では、中学校になった時にどのような生活になっているのか、見通しを持て

るような授業内容にすると、より自分事としてとらえる意識につながると考えられる。さらに小学校高学年においては、中学校に備えて、思春期の心と体を見据えた内容の授業を行っていくことが大切である。

【自己の心身】については、未知の自分に対する興味を含めた【自己の発達段階との関連性】が多く、第二次性徴期に関連して授業の実施時期がリンクしていることや思春期特有の悩みを抱いていることと関連し、より印象深くなっていると考えられる。次いで、病気やけが、生活習慣等の【経験との関連性】が多く、自己の心身を振り返りながら学ぶことにより、内容が印象に残りやすいことが考えられる。

【活動形態】については、実際に自分で体感をしたり変化をみたりする【実験】が一番多かった。自分で楽しみながら実験することで、より自分事としてとらえることができ、印象に残りやすいと考えられる。また、体を動かし体験をする救命の講習など【体験型の学習方法】が印象に残っていた。今回新たに、【男女別】での実施や活動形態を工夫し、体験したり発表したり主体的な活動を行う【薬学講座】や【委員会活動との関連】が印象に残りやすいことが明らかとなった。

他にも、授業時間のみではなく、【繰り返しの指導】によって定着を図る【授業外の時間との連係】、おもしろい【教員の印象】や【教授のわかりやすさ】等の【教員の個性】、【テスト】のために必死に覚えた【授業外の活動】などが印象に残る結果となった。

今回、印象に残った理由について大学生対象の先行研究と同じように8のカテゴリーに分類したところ、先行研究の大学生と今回の調査対象者とにおける分布の有意差は見られなかった。これにより、先行研究のカテゴリー化の汎用性についても実証された。また、8のカテゴリーに分類されたことから、小学校での学びの印象は大学生になっても続くため、早い段階からの保健教育での学びが、生涯における心身の健康に左右すると考える。さらに、サブカテゴリーについては新たなものが生成されたため、より具体的に印象に残る理由を分類することができた。そのため、保健の授業内容をより印象に残るようにするためには、発達段階をふまえながら自己との関連を深めるような授業内容や、小中の接続を考慮しながら心身の変化を感じられるような内容8のカテゴリーにあるような内容を有効に活用していくことが大切であることが明らかとなった。

3) 現在も役立つ保健授業内容とその理由

小学校における授業内容で、現在も役立っていることや継続していることについて、実態調査の8項目に分類した。さらに、（図2）のように36の内容に分類しカテゴリー化したところ、【生活習慣】【感染症対策】【病気の予防】【けがの防止】【心の健康】【身の回りの環境】【喫煙・薬】【他者】の8のカテゴリーに分類された（図3）。

現在役立っていることや継続してできていることについて分析した結果、【生活習慣】、【感染症対策】、【けがの防止】については、記述上は実践できている生徒が多かった。そのため、小学校は基礎作りとして引き続き保健の授業を行い、中学校においてより科学

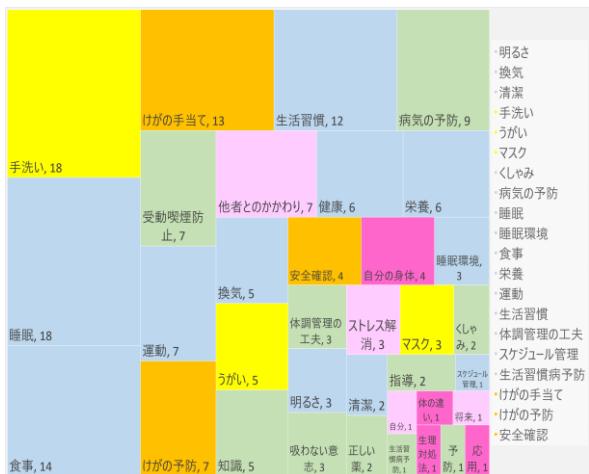


図2 質問3のカテゴリー別



図3 カテゴリ一分類

的に学ぶことで、子どもたちが自らの健康に対する健全な意識を醸成することにつながると考える。

反対に、【身の回りの環境】【他者の視点（他者意識）】【心の健康】の視点を持っている生徒が少なかった。特に【他者の視点】を取り入れることで、より様々な項目で行動変容につながる可能性があることが示唆された。そのため、他者にも目を向けられるような教育を行っていくことも検討していく必要がある。また、【身の回りの環境】について、小学校と中学校の清掃の実態から、健康面での教育と日常生活での指導を、合わせながら強化していく必要がある。

一方、現在は役に立っていることが「ない」と答えた者が 12.7%いたことから、小中の連携を図ることにより効果的な保健授業を実施していく必要がある。

4) 保健授業に対する印象度と役立つことの比較

印象に残っている内容と現在も役に立っている内容を比較した（図4）。

印象度で一番高かった「喫煙・飲酒・薬物乱用」について、現在も役に立っていると答えた者は 21 人であった。未成年であるため、直接関わる機会は少ないが、危険性については知識として小学校の段階で身についているため、これからも継続して薬学講座等も活用しながら行っていく必要がある。

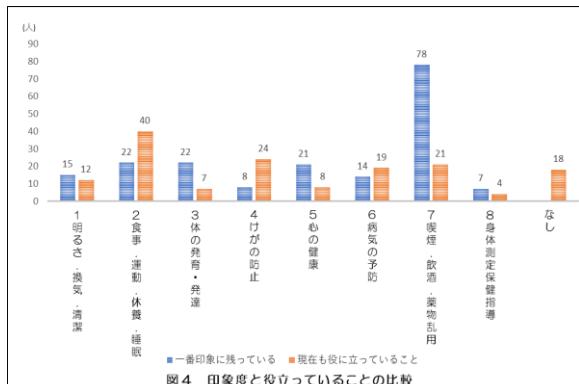


図4 印象度と役立つことの比較

現在も役に立っていることについて、「毎日の生活と健康（食事・運動・休養・睡眠）」が最も多かったため、小学校における保健の授業では生活するうえで重要な内容が継続的に行われている様子がうかがえるが、印象度はそれほど高くはなかった。そのため、印象度と学びの継続性は一致していないことが多いこと、もしくは、わかったつもりでいる生徒が多い可能性がある。授業内容は、わかったつもりの記憶で印象に残るのではなく、早い段階からどのように理解し、毎日の生活の中で実践につなげていくかを大切にする必要がある。

藤原（2013）は、保健教育の「わかる」と「できる」との関係性について整理しており、「わかる」は①新しい事実・考え方・法則などを知った時、そしてそれがすでに自分が持っている知識や経験とつながったとき②ある事象についての原因と結果が自分の思考の中でつながったとき③新しい知識によって既に持っていた知識の不確かな部分がはっきりしたとき④経験・観察したことが新しく得られた知識によって納得できた時⑤既に持っている観念や概念が新しい知識によって修正されたりひっくり返されたりして新しい概念や観念が自分の思考の中に形成されたとき⑥身についていた知識や技術を使って新しい事象や問題が解けた（解決した）ときと述べている。今回の実態調査結果からも、新しい知識を身につけたり、自分の経験とつながったり納得したりすることで印象に残っていると回答している生徒は多いが、実際に日常生活をみてみると生活習慣の乱れている生徒は多く感じられる。

さらに、藤原は、「できる」は、学習したことが生活の場面で行動に移せることとし、認識が行動につながるようにするために、①行為（技、術、行動）の必要性や根拠がわかる学習、②技や術を身につける学習③行動選択の場面で自分なりに考え、判断できるようになる（思考力や判断力を育てる）学習、④行動しようとする意志や決断を支え励ます（メンタルスキルや意思を育む）学習、などをどう工夫するかが重要であると述べている。

上記のことをふまえて、他者意識を育みつつ学びの印象と実践への継続性を保つための方法として、ケースメソッド教授法が考えられる。ケースメソッド教授法は、学習者が判断や対処を求められる模擬ケースを教材とし、討論しながら意思決定や問題解決の実践力を磨くことを目的として開発された討論形式の授業であり（高木ら 2006）、渡邊、鎌塚（2018）によると、これにより多様な価値観への気づきを得た子どもは、保健の授業で健康な生活を実現していくための知識や技能を身につけた上に、多様性・共生の視点に立った

深い学びができるのではないかと示唆している。そのため、今後、小学校と協力しながら、ケースメソッド教授法等を実践に取り入れていくことも視野に、保健教育の充実を図っていく必要がある。

2. 方法 2

本校研究協議会にて①なぜ印象に残らないのか②印象に残るためににはどのような手立てがあるかグループごと話し合い（図5）を行い、分析した結果、①では5のカテゴリー【自己との関連の希薄さ】【興味・実感が薄い】【授業研究・時間不足】【定着度の確認・テストの未実施】【教員の個性・教科の専門性不足】が生成された（表2）。②では、【生活とのつながり】【興味・実感、追求】【授業づくりと活動形態の工夫】【定着度の確認】【専門性を高める】の5のカテゴリーが生成された（表3）。

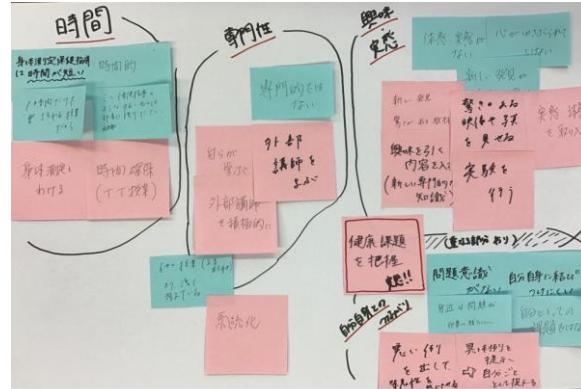


図5 グループワーク(例)

表2 なぜ印象に残らないのか	
自己との関連の希薄さ	<ul style="list-style-type: none"> 特に、明るさ・挨拶・清潔について、本人が課題としてとらえていない（困り感がない）。 生活習慣病（脳卒中・心筋梗塞）はまだ自分には関係ない。 知識としては持っている内容だから、どこが危ないどういう行動をすべきかが言える。 小さいころから関わっているから、その授業の印象が弱い。 反応期でない（知らない）。 問題意識がない。 身近な問題ほど印象に残りにくい。 自分自身に繋びづけない。 自分にとっての課題ではない。 生活の中ですでに学んでいること、当たり前。 自分事としてとらえにくい。 直接的に自分の体に影響していることが分かりにくい。 内容が当たり前、もう当たり前にできるこだと思ってしまっている。 自身の生活に關係のないこだと思ってしまっている。 自らの生活に直接結びづけられるのではないか。 子ども自身の生活との関係が薄い。 学んだことを表現することはできないが、心の中・体の中に必ず残っているのだと思う。 「印象に残る」数値が低いことをあまり問題にする必要はないと思う。 日常困っていない、母や教師が調整している（他の人がしてくれたから、自分と関わりがない）。 小学生は自らがスタイルを決めなければならないから。
興味・実感が薄い	<ul style="list-style-type: none"> つまらない、「自分が」という考え方よりも「ほかの人（大人）がこのようにしている」というように考へるから。 今の生活習慣は大丈夫だから、間かなくても大丈夫。 子どもたちが重要な事を感じていない。 わかっていてもうやれやわざといふか具体的にわからない、できない、意志が弱い。 インパクトが薄く、授業に退屈してしまうのではないか。 体感、実感がない。 心が振されていない。 新しい刺激印象が薄い。 危機感があり持てないから危険度を伝える衝撃が足りない。 具体的な対応方法などを示されず、生かしづらいのではないか。 自分ではともと分かってつもりでいるから。 危機意識を持てていない。 授業内容がただ見た目や興味・関心を持つことができない内容。 運動・食事・けがの防止などは自分がやること。授業は親がやり、体の発育は自分で意識（なくとも）やらなくて（自然に）起るこのなので、記憶から消えていくのではないか。 教科書の内容をそのまま言っているだけで実践することがないことが多い。 内容の対象が、光や空気、細菌など、目に見えずイメージしづらい。 日常的なテーマで、インパクトのある画像などがない。 教科書を読むだけの学習・授業。 手洗いの流れが方案がない。 取り扱う教員側の優先順位が下がる。 印象に残らようとする授業や指導を展開していく。
授業研究・時間不足	<ul style="list-style-type: none"> 授業時間が少なくて、伝わりきらない。 一つつの授業時間が短い。 授業研究が必ずしも実感と離れていた。 身体測定保健指導は時間が短い。 1時間だけで終わる授業だから。 ミニ保健指導のような短いものは印象に残りにくい。 授業時間数は保健指導の回数が少ない。 取り扱われる絶対的な時間数が不足しているのではないか。 定着度を確認する作業がなかった？薄かった？ 受験科目じゃない、生徒のモチベーション低い。 他の授業（主要教科）よりも楽々えている。 中学生にとってテストの重みがないと復習しようと思わないことがある。 成績等に拘泥しないなど、聞いて覚えるという意識が他教科に比べて低い。 授業が下手。 専門的ではない。 「~しない」という教え方。
定着度の確認・テストの未実施	
教員の個性・教科の専門性不足	

表3 印象に残るための手立て	
生活とのつながり	<ul style="list-style-type: none"> 危機意識を持たせる。 具体例を提示、自分事としてとらえる。 自分の生活と内容を結びつける。身近な内容として考える。 自分の生活に行かせる形。 日常生活と関連 保健授業は日常生活でやっとわかる一小中で指導内容に共通性を持たせる。 自分の生活を振り返って、自分事としてとらえさせる授業を行う。 自分の学校の健康課題を把握する。
興味・実感、追求	<ul style="list-style-type: none"> 悪い例を出して、緊急性を感じさせる。 自分で調べ追及していく時間をつくる。 興味を引き内容を入れる。 新しい発見、驚きがある教材を。 五感に訴える。 驚きのある映像や写真を見せる。 授業内容の工夫 具体物を使用、体験型の授業、実験 具体物を使い、汚れを可視化一清潔 専門家による授業 授業中に薬剤師が検査を実際に見せる。 外部講師を招ぶ、積極的に。 外部講師の活用 時間確保（TT授業） 繰り返し時間をかける。 長期的に授業を行い確認 系統化 脅すばかりではなく、成功者のコメント、研究成果を突きつける。 体育科との連携 生徒・保健委員会、生徒会の活用 体験 自ら体を動かす。 実感、体感を取り入れる。 動きを取り入れる。 実験：目で見える工夫を行う。 実験を行なう。 実験等で実践したくなるように、理科
授業づくりと活動形態の工夫	<ul style="list-style-type: none"> 成績をつけるといいのではなく、しかし、成績のためにやってほしくない。 定着度を確認する手立てを工夫する。 習慣化までむかわいく（チェックシート、先生との関わり）。
定着度の確認	
専門性を高める（教員の個性）	<ul style="list-style-type: none"> 授業力を向上させる。 授業研究・公開授業を積極的に。 自らが学ぶ。 養教が新しい知識を身につける。 新しい専門的な知識

(1) 印象に残らない理由

【自己との関連の希薄さ】については、自分自身とのつながりを見出し難く自分事としてとらえるのが難しいこと、環境については生活の中で既に学んでいる、当たり前に行っていることが多いこと、親や教員が生活など周辺環境を整えているため日常生活に困っていないことなどが挙げられた。

【興味・実感薄い】については、危機感があまり持てないこと、インパクトが薄く授業に退屈してしまうこと、授業内容が新たな発見や興味・関心を持つことができない内容であることなどが挙げられた。

【授業研究・時間不足】については、授業時間が少なくて伝わりきらないこと、教科書を読むだけの学習・授業となってしまうこと、授業研究が足りず実態と離れてしまうことなどが挙げられた。

【定着度の確認・テストの未実施】については、定着度を確認する作業がなかったこと、中学生にとってテストの重みがないと復習しようと思わないこと、他の授業より浅く考えている可能性があることなどが挙げられた。

【教員の個性・教科の専門性不足】については、教科の専門性が足りないことや養護教諭においては授業に慣れていないことなどが挙げられた。

(2) 印象に残るための手立て

【生活とのつながり】については、まずは自分の学校の健康課題を把握し、課題をふまえた上で、日常生活と関連させて具体例を提示したり自分の生活を振りかえったり、生活とのつながりを持たせて自分事としてとらえさせたりすることが有用であることが示唆された。また、日常生活と関連させて習慣化できるよう

に工夫することなどが挙げられた。

【興味・実感、追求】については、子どもたちが自分で調べて追求していく時間を持つことや、新しい発見のある教材を取り入れることで、より興味や実感の持てる内容になるはずである。

【授業づくりと活動形態の工夫】については、具体物、体験型、実験等を取り入れて目に見える工夫をして五感に訴えること、外部講師を積極的に活用すること、大事なことは繰り返し時間をかけて行うなど授業づくりを工夫する必要がある。継続的に授業を行い、小中で指導内容に共通性や学びの系統性を持たせることで、より自分の生活に生かせるものになると考えられる。また、授業づくりを工夫する中で、専門家や体育科及び他教科の教員、生徒保健委員会や生徒会との連携を図ることにより、活動形態にさらなる工夫を重ねることができると考える。

【定着度の確認】については、授業での学びを習慣化までもっていくためにも、定期的に定着度を確認したり、チェックシートを活用したり、必要時成績にも反映させたりしていくことも有用であろう。

【専門性を高める】については、授業づくりとともに、教員の専門性を高めていく必要がある。養護教諭は常に新しい知識を身につけるように努め、授業研究や公開授業を積極的に参画して自らが学び続けることで、専門性を磨き上げることにつながるはずである。

このように、2つの視点からグループ協議を行ったことで、小学校・中学校の保健教育を進める上での有効な手立てを新たな視点から考えたり、深めたりすることが可能となった。また、協議を行うグループを、現役養護教諭と養護教諭養成課程の学生を混合させ、学生の理論的思考と現職の実践経験を交流することにより、互いに新たな視点を得ることに役立った。

また、実態調査の結果から「保健授業を受けて現在、役立っていることはない」と答えた生徒が一定数いたが、現在はまだ役立っていない授業内容も「心の中・体の中に残っている」という視点があることなど、ワークショップを通して見方に変容がみられた。結果がすぐに出ないことも念頭に置き、小中で連携を図りながら子どもたちのあらわれを、次の発達段階で評価していくことも視野に入れる必要があると示唆された。

一方、今回は保健教育がいかに印象に残るかという視点で議論したが、基本的な学習内容をきちんと理解し定着させるために、保健授業の中で、「なぜ、どうして」というメカニズムを自分の頭で考えるトレーニングをして、溢れている健康情報に対して自分で考えて行動する必要がある。そのため、ヘルスリテラシーについても小中で連携し、保健教育に取り入れていく必要性があると考える。

また、今回の実態調査結果や先行研究、研究協議会において、印象付けるための手立てとして画像を見せる、視覚的に訴える、感動もののVTR等の有効活用があげられていたが、提示の仕方によってはかえって学習者の思考停止を招く可能性もあるという意見もあった。そのため、発達段階を考慮しながら慎重に取り入れていくことが大切である。

V. 成果と今後の課題

先行研究では、大学生が過去の授業内容を振り返る調査を実施することで、おおよその校種ごとの特徴を

とらえることができたが、今回は次の段階の校種で調査したため、より子どもの記憶が鮮明なうちに調査することが可能となった。そのため、小学校・中学校にとってより子どものニーズや実態に合った保健教育を進めるうえでの有効な手立てを把握することができた。

特に【他者の視点】を取り入れることで、より様々な項目で行動変容につながる可能性があることが示唆されたため、他者にも目を向けられるような教育を小中の接続を意識しながら行っていくことも検討していく。

本校の研究課題として、小学校・中学校で協力しながら保健教育を進めるにあたり、保健の学習内容における学びの連続性を確認する有効な手立てを検討する必要がある。定期テストなどで学びの確認ができる教科とは異なり、保健については確認の場が生活そのものであるため、有効な術がなく、積み残しの有無を把握しにくい状況がある。

今後、これらの課題をふまえて保健教育の内容を構造化して、実践の有効性を検証するとともに、さらに研修を重ねて、より保健教育を充実させるための中接続における有効な手立てにつなげていく必要があると考える。

VI. 引用文献

- 黒岩聰子、久保明広、西岡徹、名古屋由美子、栗原淳、堤公一（2015）「小中連携で進める学校保健－養護教諭によるライフスキルを視点とした授業実践－」佐賀大学文化教育学部附属教育実践総合センター、(32)、pp. 177-192
高木晴夫、竹内伸一（2006）『日本型ケースメソッド教授法』、ダイヤモンド社
日本学校保健会（2013）『中学校の保健学習を着実に推進するために』
日本学校保健会（2018）『児童生徒の健康状態サーベイランス』
藤原和也（2013）『養護教諭が担う「教育」とは何か』農文協
文部科学省（2017a）『中学校学習指導要領解説保健体育編』
文部科学省（2017b）『現代的健康課題を抱える子供たちへの支援～養護教諭の役割を中心として～』
文部科学省（2019）『「生きる力」を育む小学校保健教育の手引き』
山崎朱音、鎌塚優子、野津一浩（2018）「小学校・中学校・高等学校における保健授業の指導方法に関する研究：大学生を対象とした保健授業の実態調査より」、『静岡大学教育実践総合センター紀要』28、pp. 173-182
渡邊睦美、鎌塚優子（2018）「養護教諭の専門性を活かした横断的学习の試み：保健と道徳の繋がりに着目して」、『静岡大学教育実践総合センター紀要』、28、pp. 325-334